調査報告

トロス司教座聖堂出土碑文の概要（四）二〇一三年度の発掘から

師尾晶子

キーワード
碑文　スポリア　碑文の部材転用　司教座聖堂　トロス　リキア

二〇一二年度につづき二〇一三年度の調査においても、碑文の発見は数点にとどまった。一方、昨年の段階ではコンテクストが不明であった説教壇の欄干と考えられる石板の裏にわずかに残された碑文断片について、石板が棺の再利用であったこと、碑文は棺に刻まれた墓碑銘の一部であったことが判明した。以下、本年の調査で出土した碑文の概要と、昨年出土したこの石板について報告する。

（一）南側廊出土の建築部材に転用された献呈碑台座（188、図1aおよび図1b）

現存部分、幅最大〇．二八七メートル、奥行〇．五六メートル、高さ〇．一九三メートルの石灰岩の台座。石材の厚みから、顕彰献呈像の台座と思われる。碑面をのぞいてオリジナルの面は残されていない。碑面の現存部分は幅最大〇．二八七メートル、高さ〇．一九三メートル。文字の高さは〇．〇〇二五メートル（オメガ［Ω］は〇．〇〇二〜〇．〇〇二二、ロー［P］は〇．〇〇三メートル）、行間は〇．〇〇一〜〇．〇〇一四メートル。文字はくっきりと深く刻まれ、ていねいにセリフがほどこされている。ほぼ円形のオミクロンとオメガが用いられ、アルファ、デルタ、ラムダ、ユプシロンなどの斜め線は、弓状に反るような形で湾曲している。水平線がくさび形に曲がっ

たアルファ（Ᾰ）が用いられている。典型的な一～二世紀の字体である。

残存する文字は三行で、[--Κ]ΛΑΥΔΙΩΙ ΚΑΙΣΑ[ΡΙ ΣΕΒΑΣΤΩΙ ΓΕΡΜΑΝΙ]ΚΩΙ ΥΙΩΙ ΤΟΥ ------ ΑΥΤΟΚΡΑΤ[ΟΡΙ--]（または[ΟΡΟΣ--]）と読める。[1] ここからクラウディウス帝（帝位四一～五四年）ないしネロ帝（帝位五四年～六八年）に献呈された碑であることがわかる。次年度以降の確認が必要であるが、石の上部表面に像を取りつけた痕がみられないことから、残存部分は台座の中央部分（両足の間の部分）である可能性が高いように思われる。さらに、ΚΑΙΣΑ[ΡΙ] と [ΓΕΡΜΑΝΙ]ΚΩΙ の間に ΣΕΒΑΣΤΩΙ が補われるであろうことから、台座のもともとの横幅は〇・八五～〇・九メートルくらいあったと推測される。

（二）南側廊第七室（Ｒｏｏｍ７）から出土した碑文断片（３７９、図２）

幅最大〇・〇八五メートル、高さ最大〇・二一メートル、厚さ〇・〇七五メートルの石灰岩の碑文断片。左端はオリジナルである。現存する碑文は五行で、各行左端の二文字ないし三文字しか残存していない。文字の高さは〇・〇三～〇・〇三五メートル。きわめて整った字体で刻まれており、水平線がくさび形に曲がったアルファ（Ᾰ）、アルファベットのCを横にしたもの（Ｃ）に水平線を引いた形のオメガが用いられている。碑文の内容は不明であるが、字体からは一～二世紀のものである可能性が高く、刻文の精緻さから公的な碑文であった可能性が高い。独立した碑石なのか、左右に同じような石を配した壁面ないし連続する台座に刻まれた碑文であったのかについても現時点では不明である。

（三）南側廊から出土した円筒形記念碑の断片（２３１、図３ａおよび図３ｂ）

現存部分、幅最大〇・三七メートル、高さ最大〇・三三八メートル、厚さ〇・二一メートルの建築部材に転用された碑文断片。本来の形状は上下に凸状の輪郭装飾を施された円筒形で、上部の輪郭装飾は一部残されている。現存部分のカーブの状況から推測される本体部分の半径は、〇・二二～〇・二三メートルである。碑文の残存面から、昨年発見された**（三）[石材番号一六〇]**[2] および一昨年完全な形で発見されたもの**（一）**[3] と同様の性格の葬礼記念碑であることがわかる。碑文は上から四行分が現存するが、一行目をのぞいては二～四文字が読みとれるのみである。文字高は一行目が〇・〇一七メートル、二行目が〇・〇一五メートル、三行目が〇・〇一八メートル、四行目が〇・〇一六メ

ートル（ただしオミクロンのみ。一行目のオミクロンはそれぞれ〇．〇一七、〇．〇一五、二行目のオミクロンは〇．〇一四メートル）で、行間は〇．〇一六メートルである。水平線がくさび形に曲がったアルファ（Ᾰ）、左右の垂直線の長さの等しいパイ（Π）が用いられている。一行目に主格でヘルモリュコス（ΕΡΜΟΛΥΚΟΣ）の名が読みとれるが、それ以外の復元はむずかしい。

（四）文字の刻まれた石片（図4）

幅最大〇．〇六三メートル、高さ最大〇．〇七二メートル、厚さ〇．一一メートルの碑文断片。碑文の性格は不明である。計三行、三文字が読めるが、確実に読めるのは、二行目のエータ（Η）と三行目のカッパ（Κ）のみである。

（五）コリント柱頭に逆向きに刻まれた文字（384、図5aおよび図5b）

直径〇．〇五六メートルのコリント式柱頭にBEPの三文字が柱の向きとは逆に刻まれている。文字の高さは〇．〇三二～〇．〇三六メートルで、深くくっきりとノミで刻まれている。柱の向きと逆であることから、再利用時に刻まれたものと推測されるが、その意味は現時点では不明である。文字は一面にのみ刻まれており、他の面にはない。

（六）身廊から出土した説教壇の欄干と思われる石板の裏に刻まれた碑文（25、図6aおよび図6b）

昨年出土した説教壇の欄干に再利用されたと考えられる石板[4]について、残存の文字および碑面側の表面形状の特徴から、石棺の再利用であることが明らかになった。

石板の上下に残る線と線の外側のノミ痕は、石棺の縁取り装飾を削り取ったために生じたものと考えられ、また文字の周囲の表面の傷みは、碑銘を刻文するために彫られた「持ち手装飾付き銘板（*tabula ansata*）」の浮き彫り彫刻とその中に刻まれた文字を削りとったために生じたものと考えられる。文字の刻まれた面が、現地で一年間、雨ざらしの状態におかれたことで、削り取られた部分がうっすらとではあるが推測できるようになった（図6b）。端が内側に丸く入りこんだオメガ、ヒーに水辺線が引かれた記号Ϟ、ミュー（Μ）とプシー（Ψ）の四文字は、削り残された文字であった。石棺本体の正確な大きさについてはもう少し検討が必要であるが、蓋をのぞいた側面板の大きさは、おおむね幅二～二．二メートル、高さ〇．八四メートルとなる。

小アジア、とりわけリキア地方で数多く発見されている類例から、おおまかな碑文の再現が可能である。「（．．．墓に何人たりとも埋葬してはならない。もしも守らなかっ

たらetc.）その者はトロスのデーモス（あるいはゲルーシア、ポリス）に罰金●デナリウスを支払うこと。通報者はその三分の一（あるいは二分の一）を取り分として受け取ること」というたぐいの文言が刻まれていたと推測され ΜΥ は λαμβάνω の中動態直説法未来形 λήμψεται（ΛΗΜΨΕΤΑΙ）の部分と考えられる[5]。この地域特有の墓荒らしに対する警句である。

註

（1）三行目の ΑΥΤΟΚΡΑΤ[ΟΡΙ---]（または [ΟΡΟΣ---]）が被献呈皇帝にかかるのか、あるいはその父皇帝にかかるのかについては、現時点では不明である。被献呈皇帝本人であれば与格形 αὐτοκράτ[ορι] に、二行目の ΤΟΥ 以下の父皇帝にかかるのであれば属格形 αὐτοκράτ[ορος] となる。なお、写真による限りでは、三行目の左から三文字目のΤの下にユプシロン（Υ）が読めるように見えるが、これについては、次年度以降再確認する必要がある。

（2）拙稿「トロス司教座聖堂出土碑文の概要（三）二〇一二年度の発掘から」『史苑』七三－二（二〇一三）一三九～四〇頁。

（3）拙稿「トロス司教座聖堂出土碑文の概要（二）二〇一一年度の発掘から」『史苑』七二－二（二〇一二）一五六～七頁。

（4）上掲註2論文、一四〇～一頁。

（5）トロスの事例では、*TAM* II 599, 600, 614, 622, 633, 634 がある。これらの文言と215番の残存アルファベットの位置とを比較すると、[---ἄλλῳ δὲ οὐδενὶ ἐξέσται θάψαι τινά κτλ., ἢ δ]ώ[σει Πλωέων τῷ δήμῳ] Ϗ [-- ὧν ὁ ἐλέγξας λή]μψ[εται τὸ τρίτον] というような補いが可能かもしれないが、文字数と復元についてはもう少し考察を必要とする。小アジアにおいて、墓碑銘に墓荒らしに対する警告が刻まれたことについての概観は、J. R. M. Strubbe, "Cursed Be He that Moves My Bones," in C. A. Faraone/ D. Obbink, *Magika Hiera : Ancient Greek Magic and Religion*, Oxford 1991, 33-59 を参照。また一連の碑文史料を収集した史料集とし

て、idem, *APAI ΕΠΙΤΥΜΒΙΟΙ: Imprecations against Desecrators of the Grave in the Greek Epitaphs of Asia Minor. A Catalogue*, Bonn 1997 がある。

（千葉商科大学商経学部教授）

図 1a

図 1b

図 2

図 3a

図 3b

図 4

図 5a

図 5b

図 6a

図 6b

The Basilica Project, 2013: Inscriptions

MOROO, Akiko

During the summer season of 2013 we found a few inscriptions including a fragmentary honorary statue base for an emperor (Claudius or Nero) and a fragmentary inscribed grave altar. A brief description and photographs of these monuments are posted.

In addition, the nature of a rectangular panel reused for the ambo having been found last summer (Stone No. 25) now became clear. It was originally a stone slab of a sarcophagus. Four letters remaining on the extreme left were a part of an inscription giving a warning against violators of the tomb originally having been engraved within a *tabula ansata*. A brief description of this inscription is also offered.